

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年8月30日現在

機関番号：82603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01175

研究課題名（和文）近現代ハンセン病医学資料の研究とデータベース作成

研究課題名（英文）Research and database creation of modern and contemporary leprosy medical materials

研究代表者

森 修一（Mori, Shuichi）

国立感染症研究所・ハンセン病研究センター 感染制御部・室長

研究者番号：40559522

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：現在、日本のハンセン病政策は公衆衛生政策上の過失であったと評価されるが、その実態は未だ十分には検証されていない。その要因の一つがハンセン病の医学的側面の研究の不十分さ、日本と世界のハンセン病政策の比較研究の不足にある。本研究では日本のハンセン病政策を再評価するために、日本と世界のハンセン病関連資料（特に医学資料）を研究すると共に、当事者（療養所OB、回復者、政策担当者OBなど）に聞き取り調査を行った。また、これらの研究、調査に加え、これまで公開されていなかった資料を収集し、データベース化（非公開）を行い、Web公開型学術データベースの基盤を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、日本のハンセン病政策は公衆衛生政策上の過失であったと評価されるが、その実態は未だ十分には検証されていない。その要因の一つがハンセン病の医学的側面の研究の不十分さ、日本と世界のハンセン病政策の比較研究の不足にある。本研究では日本のハンセン病政策を再評価するために、日本と世界のハンセン病関連資料（特に医学資料）を研究すると共に、これらの資料に加えこれまで公開されていなかった資料を収集し、データベース化を行った。本研究は、失われつつある資料の保存と未来への継承、学術・検証研究の促進、公衆衛生対策の立案・実施に役立てる、エビデンスに基づく効果的な啓発に役立てる、などに大いに貢献すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：At present, it is considered that Japan's leprosy policy was a fault in public health policy, but the actual situation has not been fully verified yet. One of the factors is the insufficient research on medical aspects of leprosy and the lack of comparative research on leprosy policies between Japan and the world. In this research, in order to re-evaluate leprosy policies in Japan, we study leprosy-related materials (especially medical data) in Japan and the world, and interview with the parties (seniors, recovery workers, policy officers, etc.) went. Also, in addition to these studies and surveys, we collected materials that had not been published until now, made a database (privately), and created the foundation of the Web-release-type academic database.

研究分野：ハンセン病の医学史・社会疫学

 キーワード：ハンセン病 隔離政策 公衆衛生政策 ハンセン病医学 医学資料 聞き取り調査 資料の収集・保存  
データベース作成

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者の森は、日本のハンセン病政策の確立と維持の要因をハンセン病医学の進展過程と公衆衛生政策の関わりから追求してきた。また、その研究の過程で、犀川一夫（光田健輔の弟子、日本で最初にハンセン病の特効薬「プロミン」の治験を行い、台湾と沖縄にハンセン病の外来治療の道を開いた。元沖縄愛楽園園長、解放医療の先駆者）および石原重徳（光田健輔の弟子、元駿河療養所所長、同じく解放医療の先駆者）と親交を持ち、聞き書き調査に協力をいただく過程で、日本と世界のハンセン病政策の共通性と違いについて学び、これまで言われる単なる過失、医学の偏見とは違うハンセン病政策の実態を知るに至り、ハンセン病と医学の関わりに関する研究、WHO の解放医療政策に関する研究、世界の隔離政策に関する研究、日本の隔離政策下での解放医療の試みに関する研究、日本の隔離政策関係者への聞き取り調査によるその実態解明の研究、などを行って来た。この過程で多くの資料の譲渡を受けると共に独自に資料を収集し、そのデータベース化を行って来た。その過程は以下の研究にある。

森 修一「ハンセン病と医学 - 隔離政策の提唱とその背景 - 」(『日本ハンセン病学会雑誌』[2006])では、ハンセン病隔離政策の提唱の背景を日本における近代医学の成立の過程とその主導者であった土肥慶蔵、北里柴三郎などの医学者の意見や当時のハンセン病医学（日本と世界、特に疫学、治療）と公衆衛生政策との関わりなどから考察した。森 修一「ハンセン病と医学 - 絶対隔離政策の成立と継続 - 」(『日本ハンセン病学会雑誌』[2007])では大正時代から昭和の始めにかけて高まる隔離政策確立への動きを、日本の隔離政策推進の中心人物であった光田健輔や世界の隔離政策の研究などから考察した。森 修一「草津湯の沢ハンセン病自由療養地の研究」(『日本ハンセン病学会雑誌』[2004-2005])では、日本における隔離政策の進展と湯の沢部落（群馬県草津温泉にあったハンセン病患者村）の関わりを、帝国議会における自由療養地議論と光田健輔との関係から明らかにした。森 修一「ハンセン病の疫学」(『総説ハンセン病医学』東海大学出版会、[2007]所収)では、ハンセン病の疫学研究の歴史と隔離政策進展の関連を考察した。これらの過程で日本の隔離政策の特殊性と世界との共通性を認識し、根幹にある問題を明らかにすべく、ハンセン病政策と医学の関わりを検証に着手した。その過程で犀川一夫とともに、ヨーロッパを起原とした世界のハンセン病隔離対策の歴史を古代から現代までに亘り、医学と宗教の関わりを中心とした論点から検証し、犀川一夫、森 修一、石井則久『世界ハンセン病疫病史 - ヨーロッパを中心として - 』皓星社、2012年を著した。

2012年からは、これまで明らかとなっていない日本の隔離政策における入所者数・退所者数の動向を、日本ハンセン病学会会員の方々との協力の下で独自に資料を収集し、1909年から2010年までの102年間の記録から検証し、そのデータをまとめた。本研究の結果から日本のハンセン病政策の総論と各論の問題が明らかとなった。また、日本における患者発生の動向とその分子疫学について研究し報告した(*J Dermatol Sci*.67:192-4,2012.)。2014年には日本近世のハンセン病の様相を明らかにすべく、「鍋かぶり葬」の骨化石から「らい菌」(ハンセン病の起原菌)のDNAの検出を行い、近世におけるハンセン病患者への慣習的扱いなどについて考察した(*PLoS ONE*.9 e88356, 2014)。その他、台湾のハンセン病解放医療の進展に関する研究、東北新生園における農業コロニー「東北農場」(療養所内の社会復帰訓練施設)などの研究を継続している。2013年からはこれらの資料に加え、犀川一夫資料、石原重徳資料、荒川 巖(元松丘保養園園長、解放医療の先駆者)資料の提供を受け、データベース「近現代ハンセン病資料アーカイブス」の構築を行っている(文科情報公開費用：課題番号15HP7007)。

このような研究を行うことが、日本の隔離政策の進展、確立、維持の要因を明らかにすることにつながり、医学が強いては科学技術がその過程でどのような選択をするのか、どのような過ちを犯すのかを検証するための貴重な記録としたい。

### 2. 研究の目的

現在、日本のハンセン病政策は公衆衛生政策上の過失であったと評価されるが、その実態は未だ十分には検証されていない。その要因の一つがハンセン病の医学的側面の研究の不十分さ、日本と世界のハンセン病政策の比較研究の不足にある。本研究では日本のハンセン病政策を再評価するために、日本と世界のハンセン病関連資料（特に医学資料）を研究すると共に、これらの資料に加え、これまで公開されていなかった資料を収集し、データベース化を行い公開し、今後の研究の進展に寄与すること、これらの資料を保存しハンセン病の歴史を未来へ語り継ぐことを目的とする。

### 3. 研究の方法

ハンセン病医学に関する国内外の文献資料の調査と系統解析を行う。併せて面談調査(国内)の候補者を選定し、聞き取り調査を行うと共に、関連する資料の受け入れ、収集を進め、データベース化し公開を始める。海外でのハンセン病医学の一次資料調査を行うと共に面談調査(国内・国外)と資料の受け入れ・収集を継続し、データベースの拡張と改善を進める。引き続き海外でのハンセン病医学の一次資料調査を続けながら、国内調査と海外調査を総合する比較研究を行う。同じく資料の受け入れ・収集を継続し、データベースの拡張と改善を進める。

#### 4. 研究成果

(1) 日本人によるハンセン病救済の進展過程の研究 - 鈴蘭村事業、鈴蘭園事業に関する研究  
群馬県草津温泉で昭和の初めに展開された日本人医療関係者(三上千代、服部ケサ)による民間救済事業である「鈴蘭病院」、「鈴蘭村」が国立療養所栗生楽泉園の建設を促したこと、これらの民間事業は救済だけでなく公衆衛生対策として行われたこと、当時の患者のおかれた状況は非常に過酷であり、これらの事業をきっかけとして、日本人による救済が始まった事などを明らかとした。また、同じく、三上千代により宮城県で行われた「鈴蘭園」事業についての現地調査・研究を進展させた。

(2) ハンセン病療養所職員OB、ハンセン病対策関係者との対談調査

犀川珠子氏(犀川一夫夫人)からは1940年代の長島愛生園の実態、光田健輔および関係者の人物像、「癩予防法」以前の患者の置かれた状況、「癩予防法」(1931年)以降の療養所内の状況、1950年代の沖縄の隔離の実態、1960年からの台湾での犀川先生の開放医療への取り組み、1970年代からの沖縄での隔離政策の実態、患者の置かれた厳しい状況、外来診療の進展、などについて詳細な聞き取りを行った。その他、大平 馨先生(元多磨全生園園長)、小林 茂先生(元栗生楽泉園園長)、湯浅 洋先生(元笹川祈念保健協力財団医療部長)、尾崎元昭先生(元長島愛生園基本治療科部長)などから聞き取り調査を行った。その過程で多くの資料の提供を受けた(犀川一夫、石原重徳、岡田誠太郎、湯浅 洋、荒川 巖、大平 馨、各先生の所有資料など)。

(3) 収集資料の目録作成とデジタル化

これまで収集した医学関連資料を中心に約9000件の資料の目録作成を行い、その内、3873件の資料のデジタル化を終了させデータベースに登録した。国立療養所松丘保養園所蔵資料の調査、目録作成、デジタル化を進展させた。国際ハンセン病会議議事録(3点)、日本癩学会学術集会議事録(4点)、笹川祈念保健協力財団の国際啓発16mmフィルム(5点)、湯の沢部落住民からの聞き書き記録「御座の湯口碑」、栗生楽泉園自治会誌「風雪の紋」、LEPRA誌(1900年代初頭の国際ハンセン病医学ジャーナル)のデジタル化とデータベースへの登録を行った。また、日本ハンセン病学会雑誌(レプラ、日本らい学会雑誌、日本ハンセン病学会雑誌、計90年分)の使用権を得て、目録作成を行った(今後はデータベースへ登録予定)。データベースに歴史データを加え、資料の時代背景検索機能を付加した。ハンセン病の社会啓発効果を「ハンセン病医学夏期大学講座」のアンケートから調査し、学術データベースのフル公開(現在は限定公開)へ向けて、どのような資料をどのように提示すべきかを研究した。また、ハンセン病資料アーカイブズの方法を時系列的違い、国ごとの状況の違い、ハンセン病医学の進展過程の背景から、各資料の意味の違いを理解した上でのアーカイブズが必要であることを研究し、論文報告を行った。

(4) 近代におけるハンセン病隔離政策の研究 - 日本と世界 -

近代に急速に進展する隔離政策の基本モデルと考えられるハワイのモロカイ療養地での隔離政策の詳細を研究し、論文報告を行った。また、世界のハンセン病政策を19世紀からの遺伝病対策(隔離、結婚禁止)その後の感染防止対策(隔離)、1960年代に始まる隔離から外来診療、1970年代からのハンセン病医療や政策の一般の医療・行政政策への統合、1990年代後半からのWHOによる多剤併用療法の試行から普及のプロセス、現在の多剤併用療法普及後の課題などを研究した。

(5) 療養所から農業コロニーへの転換構想と隔離維持への過程の研究

1940年代後半に企画された療養所から農業コロニーへの転換構想とその過程、その流れで行われた東北農場(東北新生園)および社会復帰研究会の研究(各療養所)を行い、現在の療養所維持へつながらる要因などを研究した。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計8件)

森 修一、向井 徹、四津里英、石井則久「ハンセン病医学夏期大学講座の啓発効果に関する研究」『日本ハンセン病学会雑誌』査読有り、85、55-64、2016。

森 修一「草津温泉とハンセン病 - 日本人による救済の進展 -」『日本ハンセン病学会雑誌』査読無し、85、79-86、2016。

森 修一、石井則久「国立ハンセン病療養所における入退所動向に関する研究」『日本ハンセン病学会雑誌』査読有り、86、69-90、2017。

森 修一「ハンセン病アーカイブズ構築のこれから～過去そして今を、未来に～」『日本ハンセン病学会雑誌』査読無し、86、119、2017。

森 修一「ハンセン病アーカイブズに求められるもの - 「近現代ハンセン病資料アーカイブズ」の意義と課題」『日本ハンセン病学会雑誌』査読有り、86、121-127、2017。

森 修一「世界のハンセン病政策に関する研究1-ハワイにおける絶対隔離政策の変遷」『日

本ハンセン病学会雑誌』査読無し、86、189-211、2017.

森 修一「ハンセン病対策の歴史と現状 - 日本と世界 -」『日本ハンセン病学会雑誌』査読無し、87、73-90、2018.

Kitaoka N, Fukano H, Yoshida M, Miyamoto Y, Mori S, Ishii N, Ato M, Ohara N, Hoshino Y. Discrimination of Mycobacterium leprae and Mycobacterium haemophilum in Clinical Isolates and Specimens by Multiplex PCR Assay and Prediction of Drug Susceptibility. J Clin Microbiol.57:1-3,2019. 10.1128/JCM.01760-18

〔学会発表〕(計 7 件)

森 修一、草津温泉とハンセン病 -日本人による救済の進展-、第 89 回日本ハンセン病学会総会・学術大会、2016

森 修一、田中丹史、廣野喜幸、近代のハンセン病学術誌の研究、第 89 回日本ハンセン病学会総会・学術大会、2016

森 修一、近現代ハンセン病資料アーカイブスについて、第 89 回日本ハンセン病学会総会・学術大会、2016

森 修一、宮城県下のハンセン病患者集住地の調査報告 - 私設療養所鈴蘭園事業を中心に -、第 90 回日本ハンセン病学会総会・学術大会、2017

森 修一、ハンセン病アーカイブス構築の意義とこれからの課題、第 90 回日本ハンセン病学会総会・学術大会、2017

森 修一、ハンセン病アーカイブスに求められるもの - 近現代ハンセン病資料アーカイブスの意義と課題 -、第 90 回日本ハンセン病学会総会・学術大会、2017

森 修一、ハンセン病対策の歴史と現状、第 91 回日本ハンセン病学会総会・学術集会、2018

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

近現代ハンセン病資料アーカイブス

<http://www.archhdjp.jp/>

ハンセン病政策と医学の関わりを医学史・科学史的に明らかにし、新たな検証の論点を提示すると共に、これまで未公開の資料のデータベース化を行い、順次改善し、多くの研究者に役立てることが目標である。

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：廣野 喜幸

ローマ字氏名：HIRONO Yoshiyuki

所属研究機関名：東京大学

部局名：大学院情報学環・学際情報学府

職名：教授

研究者番号（8桁）：90302819

(2)研究協力者

研究協力者氏名：瀬川 将広

ローマ字氏名：SEGAWA Masahiro